

4. 個別的特徴（多発する青少年犯罪）

娯楽としての殺人：

14才の少年2名が公園で酩酊して寝ていたアジア系イギリス人を笑いながら撲殺。その後、学校の友人に「オレ達は人殺しをやったんだぜ」と自慢していた。

The Gardian.05.11.99

1997年に警察に検挙された被疑者の年齢別発生率を見ると、男性も女性も16-24才の青少年期にある者からの発生が高くなっている（表2-3）。

10-15才年齢の少年の発生率が次いで高いことを合わせ見て、消費物資の集積した大都市中心部での20才代未満の少年による店舗からの盗犯問題の解決の重要性が指摘されている（Social Trends 29）。

さらに、盗犯だけでなく、少年による暴力犯罪、特に10代前半の少年集団による暴力的凶悪犯罪が増加傾向に在り、この問題の重大性が浮き彫りとなりつつある（左記事例参照）。

表2-3 性別年齢別被疑者の発生率（人口1万人当たり）

	男 性				女 性			
	10-15	16-24	26-34	35才以上	10-15	16-24	26-34	35才以上
窃盗及び盗品取り扱い	124	216	85	18	58	70	30	7
家屋等侵入犯罪	43	71	18	2	3	3	1	-
対人暴力	30	71	32	7	11	11	5	1
強盗	6	11	2	-	1	1	-	-
性的犯罪	3	4	3	2	-	-	-	-
麻薬取引	12	158	63	8	1	17	9	1
全指標犯罪	240	651	269	50	80	122	57	11

出典：Home Office，イングランドとウエールズのみ。

5. 個別的特徴（増加し爆発する薬物犯罪）

1996年中に警察に検挙された薬物関連の被疑者数は12万2千人に昇った（表2-4）。1981年からみると、1996年は6倍にも達する増加である。

薬物問題の深刻化：
 毎年警察学校に入ってくる新人警察官約2000名全員に薬物検査を行う事になった。薬物体験の危険性が高いためである。

The Times.19.06.99

さらに問題なのは、薬物の多様化であり、最も多くを占めるマリファナが1981年から1996年に掛けて5倍、ヘロインが12倍、コカイン (recreational drug) が8倍、覚せい剤が3倍という増加を見せている。

ソフトドラッグのみならず、最も危険視されているハードドラッグの市民の間への浸透が指摘される。1998年のイギリス国内でのヘロイン押収量は1.7トンに昇り、これはアメリカを抜く量であった。また、人口の52%が、何らかの非合法薬物との接触体験を持っている (British Crime Survey)。

イギリス最高の伝統的エリート校であるイートン校生の非合法薬物の乱用と学校からの追放、13才の売春少女が覚せい剤の過剰摂取で死亡、普通の市街地内で生じた麻薬ディーラーである両親の子供の眼前での射殺事件といった麻薬戦争の激化と殺人を中心とした凶悪犯罪の誘発が見られる (The Times.07.07.1999等)。薬物文化による普通の市民社会への圧迫が大きな政治的解決課題となっている。

表 2 - 4

麻薬関連検挙者数

	1981	1991	1993	1994	1996
マリファナ	17,227	59,420	69,707	88,540	91,736
ヘロイン	819	2,640	3,677	4,480	9,828
エクスタシ	-	1,735	2,336	3,574	6,206
コカイン	503	1,984	2,954	2,992	4,097
覚せい剤	402	427	613	729	1,357
全検挙者	19,428	69,805	87,485	107,629	122,119

出典：Home Office，イングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランド。

6. 頻発化する街路凶悪犯罪

首相の妹が路上強盗に
遭遇：

高級住宅街にある自宅
近くでバスを降りた首
相の妹が地面に押し倒
されバッグをひったく
られる。同地域で路上
強盗が流行。

The Times.05.11.99

凶悪犯罪の発生場所として街路 (street) が選択される傾向が強まっている。特に侵入強盗よりも路上強盗の多発化が進み、ローレックスを付けた金持ちを専門に狙うローレックス強盗まで出現している。

写真 2 - 3

早朝、男性がタバコを買いに出たところを待ち伏せされ射殺された事件現場。

